

報告

## 地域看護学実習における学生の学びの分析

津留響子<sup>1)</sup>・中島理恵<sup>1)</sup>・辻奈美<sup>1)</sup>・入部さつき<sup>1)</sup>・田淵靖子<sup>1)</sup>・疋田理津子<sup>1)</sup>

1) 純真学園大学 保健医療学部 看護学科

### Analyzing student learning in community nursing training

Kyoko Tsuru<sup>1)</sup>, Rie Nakashima<sup>1)</sup>, Nami Tsuji<sup>1)</sup>, Satsuki Iribe<sup>1)</sup>,  
Yasuko Tabuchi<sup>1)</sup>, Ritsuko Hikita<sup>1)</sup>

1) Department of Nursing Science, Faculty of Health Sciences, JUNSHIN GAKUEN University

要旨：本研究は本学看護学科1年生の地域看護学実習による公民館での地域住民との交流を通して、実習課題である「生活を支える地域のつながり」の捉え方が、実習前後でどのように変化したかを明らかにすることを目的に、実習前後の課題レポートの内容分析を行った。その結果、実習後には「生活を支える地域のつながり」について具体的に記述していた。

キーワード：地域看護学実習、公民館、地域住民、大学生、地域のつながり

Abstract: This research aimed to examine how first-year nursing students at our university interact with local residents at community centers during their training and how their perceptions of "community connections that support daily life" changed before and after internship. To clarify this, we carried out a content analysis of assignment reports before and after the training. As a result, students conceptualized "connections to the community" before training using highly abstract words written directly from reference materials. However, students themselves had the chance to experience interacting with locals following the hands-on training. We learned from this experience that community centers are places where people congregate, but we also learned that they are typically more geared toward older adults. As students, we are working hard to make community centers a place that brings together different generations. It was possible to get a sense of what could be done and make specific suggestions at a behavioral level, such as what should be posted on SNS.

Key words: community nursing training, community center, local residents, university students, community connections

## 1. 緒言

近年における我が国の急激な少子高齢化の進展、それに伴う人口構造の変化が保健・医療・福祉の多様なシステムの変革をもたらし、医療の目的は疾病の治癒・完治から生活の質を高める支援に転換し<sup>1)</sup>、療養の場も医療機関だけでなく、自宅や施設など、いわば「まち全体がケアのある暮らしの場<sup>2)</sup>」と考えられる。

人の命を護ることを生業とする看護職において、まずは看護の対象である人を理解することは必至である。しかし、看護の初学者である若い世代の学生においては、住環境の変化や科学技術の進歩等により、これまでに比べ、人間関係の希薄化や生活体験の不足が進んでおり、看護職員として働

くためには、対象の多様な生活スタイルや文化等を理解すること<sup>1)</sup>が課題として述べられている。

本学では、新カリキュラムの導入により、療養者である前に生活者を理解することを目的に地域看護学実習を開始した。新カリキュラム導入当初は、療養者、生活者がいる医療機関や訪問看護ステーション、地域の公民館等での実習を行っていたが、学生により実習施設が異なり、生活者の学びを深めることに限界があった。令和6年度より生活者としての理解を深めるために、地域看護学実習の場を、地域の生活している人が利用している公民館に一律した。

そこで、本研究では、実習前後の課題レポートの内容分析し、公民館での実習体験が「生活を支

える地域のつながり」をどのように捉え、何を学ぶことができたのかを明らかにすることを目的とする。本実習の学びの分析をすることで、今後の実習に生かすことができると考える。

## 2. 研究方法

### 1) 地域看護学実習の概要

地域看護学実習は1年次前期で開講される。実習開始前に実習の詳細について説明し、承諾を得た公民館21か所で実習を行った。実習の概要については、以下に示す。

(1) 実習期間：令和6年6月3日（月）～令和6年6月7日（金）

(2) 実習時間：10：00～16：00 ※公民館の体制や事業によって実習時間の変更有

(3) 実習場所：公民館21か所に3～7名をグループにして配置する。

(4) 実習内容

#### ①実習前学習

地域の生活つながりマップを公民館のある地域で作成（学外学習）、公民館長からの講話

#### ②実習前課題レポート

厚生労働白書<sup>3)</sup>の「つながり・支え合いのある

地域共生社会」を読み、「大学生として、つながり・支え合いのある地域共生社会の一員となるため、自分ができる地域参加」についてA4、1枚に記入し実習1か月前までに提出。

③地域看護学実習を各公民館で4日間実地（6月3日～6日）、7日の最終日は学内で各公民館での学びを公民館関係者を招いて発表。実習のスケジュール例を表1に示した。

#### ④実習後課題レポート

「大学生として、つながり・支え合いのある地域共生社会の一員となるため、自分ができる地域参加」について実習での経験を踏まえて記載し、実習から1週間後に実習のまとめとともに提出。

### 2) 分析対象

2024年度地域看護学実習履修者74名のうち、同意の得られた67名が記載したレポート

### 3) 研究期間とデータ収集方法

実習前後の課題レポートを研究データに使用する同意を得るために、令和6年9月、前期成績確定後、対象者が一堂に集合する後期開始オリエンテーションの機会を利用し、本研究についての説

表1 地域看護学実習のスケジュール例

6/3	10:00 オリエンテーション 11:00 館長からの話	13:00 スマホ教室 14:30 参加者インタビュー 15:00 学生カンファレンス 16:00 実習終了
6/4	9:00 夏祭り企画 10:00 子育てサロン参加 11:00 参加者インタビュー	13:00 地域協議会役員会の見学 14:00 役員へのインタビュー 15:00 学生カンファレンス 16:00 実習終了
6/5	9:30 ストレッチ体操教室準備 10:00 ストレッチ体操教室 11:30 主催事業開催後の振り返り	13:00 認知症にやさしいまちづくり講座参加 14:00 役員へのインタビュー 15:00 学生カンファレンス 16:00 実習終了
6/6	9:30 健康フェスタの準備 10:00 健康フェスタ開催 11:30 片づけ	13:00 健康フェスタ反省会 15:00 下校見守り活動への参加 15:30 学生カンファレンス 16:00 実習終了

明を口頭および書面にて行った。説明後は研究参加の可否のいずれかを記した同意書を回収し、同意が得られた学生のレポートを分析対象とした。

#### 4) 分析方法

樋口の計量テキスト分析<sup>4)</sup>の手順を参考にした。テキスト文章の質的分析を行う形態素解析ソフト KH Coder3を用いて、計量テキスト分析を実施した。解析には、レポートをテキストデータとし、エクセルデータに変換後、分析を行った。レポート中にどのような事柄が多く表現されているかを確認するため、頻度の高い語を抽出し、確認した。なお、頻出語や共起ネットワーク分析にあたっては、助詞や助動詞などのようにどの文章にも現れ、その語句自体では意味をなさない一般的な語句もあるため、それらを除外し分析対象とした。

また、形態的解析及び語の関係性を確認するための共起ネットワーク分析を行った。共起ネットワーク分析では描画する共起関係の選択は、Jaccard 係数、60個の語と語の組み合わせとし、最小スパニング・ツリーを用いて共起性を明確にした。

共起ネットワーク分析を行うにあたり、類義語の表記を統一するクリーニング作業を行った。クリーニング作業は、単語の前後の文脈を確認し、「イベント」「夏祭り」「〇〇まつり」を【イベント】、「〇〇校区」は【校区】、「〇〇公民館」は【公民館】、「学生」「大学生」を【学生】に統一した。信頼性と妥当性の確保のため、本研究で得られた結果については原文を見ながら使用された文脈を全員で確認した。

#### 5) 倫理的配慮

本研究は純真学園大学倫理委員会の承認を得た上で実施した（承認番号：24-10）。調査の実施に際し、対象者には調査の目的、内容や問い合わせ先を記載した同意書を配布するとともに、分析にあたっては匿名化するため個人の特定はされないこと、個人の成績評価には一切影響がないこと、研究への参加は自由意志であり拒否権があること、参加後の取り消しが可能となるよう期日を設定した。

### 3. 結果

分析対象の抽出語は、実習前の総抽出語数は36,733語であり、分析に使用された語は14,938語、使用された異なり語数（何種類の語が含まれてい

表2 実習前後の抽出語上位50語

順位	実習前		実習後	
	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
1	地域	839	地域	773
2	人	407	参加	457
3	参加	362	公民館	390
4	活動	308	考える	287
5	考える	291	人	284
6	社会	233	活動	242
7	高齢	177	高齢	169
8	自分	152	実習	153
9	ボランティア	146	自分	150
10	共生	127	イベント	148
11	思う	123	世代	142
12	行う	100	若い	126
13	支える	100	社会	120
14	交流	93	大学生	119
15	イベント	92	行う	119
16	コミュニケーション	90	知る	112
17	知る	89	ボランティア	111
18	一員	86	思う	105
19	問題	79	サークル	98
20	世代	70	積極	89
21	行事	65	交流	80
22	必要	65	共生	80
23	大学生	62	一員	77
24	関わる	60	支える	76
25	大切	59	若者	75
26	生活	57	情報	74
27	積極	56	行事	73
28	多い	53	方々	71
29	住む	51	コミュニケーション	70
30	方々	50	大切	68
31	支援	49	発信	64
32	今	48	利用	62
33	持つ	48	実際	58
34	住民	48	目	58
35	感じる	46	多い	58
36	機会	46	感じる	57
37	子供	46	関わる	57
38	孤独	45	行く	54
39	多く	45	SNS	53
40	年齢	44	多く	51
41	人々	43	学ぶ	49
42	関係	42	必要	48
43	増加	42	意見	47
44	理解	40	持つ	46
45	様々	39	出来る	46
46	課題	38	課題	45
47	人口	38	少ない	45
48	減少	37	学生	44
49	相談	37	分かる	44
50	公民館	35	話す	44

※網かけ、太字にした語は、上位50位以内で実習前後に共通していた語。

たかを示す数)は1,836語であった。同様に実習後の総抽出語数は37,006語であり、分析に使用された語は14,715語、使用された異なり語数は1,638語であった。

2024年度の地域看護学実習履修者74名のうち、同意が得られた67名の自由記述レポートを対象とした。

### 3.1 実習前後での抽出語の比較

実習前後の抽出語上位50語を表2に示した。出現回数が多い順に、実習前は【地域】【人】【参加】【活動】などであった。同様に実習後は【地域】【参加】実習場所となった【公民館】が上位に出現していた。

実習後、出現回数が実習前に比べて増加した抽出語の増加数上位10位までを表3に示した。実習後は実習前の抽出語上位50位以内には出現していなかった(以下、欄外。)**【実習】**や**【若い】****【校区】**が増加していた。

表3 実習後の抽出語の変化(増加)

実習前 出現順	抽出語	実習前	実習後	増加数
50	公民館	35	390	355
欄外	実習	5	153	148
欄外	若い	24	126	102
3	参加	362	457	95
20	世代	70	142	72
23	大学生	62	119	57
15	イベント	92	148	56
欄外	校区	8	42	34
27	積極	56	89	33
17	知る	89	112	23

さらに、出現が最も増加した抽出語の**【公民館】**と欄外であった**【実習】**や**【若い】****【校区】**について、原文参照機能を用いて抽出し、表4・5に示した。

学生は、実習前のレポートにおいて、**【公民館】**を「公民館や市民センターで行われている」「公民館や施設に足を運び」「公民館や公園、学校などで行われる」と施設の名称として記載していた。実習後は、「出会いの場となるのが公民館である」「公民館は生きがいとなる場所」「公民館は利用者さんの居場所」と実習先や地域の活動拠点地域の人がつながる場所として記載されていた。

**【実習】**は、「今回の実習先の中で」「公民館実習を通して」「実習に行くまでは」と自身の経験として実習後のレポートに記載されていた。

**【若い】**は、「若い世代の人との交流は少ない」「若い世代の意見や考え方が必要」と記載しており、「若いパワーを貰えた」と肯定的な記載が実習後のレポートに加わっていた。

**【校区】**は、「校区の」「校区が行っている」「地域の人が安心して住める校区にする」と実習後のレポートでは実習先や生活している場所として記載され、地区と同義語として表記されていた。

表4 実習後に出現が増加した抽出語の実習前の表記例(一部抜粋)

抽出語	表記例(実習前)
公民館	公民館や市民センターで行われている、公民館や施設に足を運び、公民館や公園、学校などで行われる
実習	学校の実習に参加する、これからの公民館実習だけでなく
若い	若い人からの視点、若い世代の人口の減少、私たちのような若い人たち
校区	校区の運動会、自分が住んでいる校区や実習で行く校区は

表5 実習後に出現が増加した抽出語の実習後の表記例(一部抜粋)

抽出語	表記例(実習後)
公民館	出会いの場となるのが公民館である、公民館は生きがいとなる場所、公民館は利用者さんの居場所
実習	今回の実習先の中で、公民館実習を通して、実習に行くまでは
若い	若い世代の人との交流は少ない、若いパワーを貰えた、若い世代の意見や考え方が必要
校区	校区の、校区が行っている、地域の人が安心して住める校区にする

### 3.2 レポート内容の共起ネットワーク分析の結果

実習前の共起ネットワークの結果を図1、実習後の共起ネットワークの結果を図2に示した。共

起ネットワーク分析に利用する語の設定は、対象語を100語程度となるため最小出現数を20とし、Jaccard 係数、上位80語の語との組み合わせを最小スパニング・ツリーを用いて共起性を明確にした。(分析方法にも記載)。共起ネットワークの円の大きさは、語の出現頻度が多いことを示し、円を結ぶ線の太さは、関係性の強さを表している。

実習前後の共起ネットワークの結果では、共通して【地域】を中心とするスパニング・ツリーが示された。

実習前は、【参加】【活動】【交流】【行う】【コミュニケーション】のサブグラフ、【地域】【人】【自分】【大学生】といった実習の内容そのものがサブグラフに示された。また、【共生】【一員】【支える】【思う】といった共生社会の一員としてできること、【社会】【ボランティア】といった地域社会のためにボランティアをする、といったレポートテーマそのものがサブグラフに示された。

実習後は、新たに【公民館】が加わり、【参加】【考える】【人】のサブグラフが示された。また、【実習】【知る】のサブグラフも新たに加わり、【地域】【活動】【自分】【大学生】のサブグラフが示された。

#### 4. 考察

##### 4.1 「生活を支える地域のつながり」の捉え方

学生は、実習前に読んだ、厚生労働白書<sup>3)</sup>に記載されている言葉を実習前のレポートに用いており、概念として認識した言葉をそのまま記載している学生が多く見受けられ、具体的な記述はな

かった。しかし、実習後には具体的な行動レベルや自分事として捉えた言葉になり「生活を支える地域のつながり」について具体的に記述していた。

実習前は名称として捉えていた「公民館」だったが、実習後は実習先や地域の活動拠点としての記述へと変化していた。学生は実習を通して、「公民館」において地域住民が健康づくりや趣味等、個人の志向に基づいた活動に積極的に参加していたことから、同じ目的を持って公民館の活動に参加する地域住民の姿から地域のつながりを捉えることができたと考える。

また、「若い世代の人との交流は少ない」といった地域の現状や課題を知る一方、「若いパワーを貰えた」と肯定的に受け止めてくれる地域住民と出会った経験や「若い世代の意見や考え方が必要」と公民館長や主事等の関係者から若い世代の代表として自身への期待の言葉を聞いた経験から、自分たちと地域で活動する人とのつながりを感じていたと考える。秋谷ら<sup>5)</sup>は、他者との結びつきの条件と町内会・家族・仲間・友人・会社といったその具体的なありようを「つながり」と呼んでいると述べている。学生は、公民館で出会った地域住民と共に活動し、肯定的に受け止めてもらえた関係性につながりを認識していた。

このように、学生自身が主体的に地域住民とかわる体験を通じて、地域のつながりの捉え方は具体的な表現と変化し、公民館は人と人をつなぐ場所であることを理解していた。

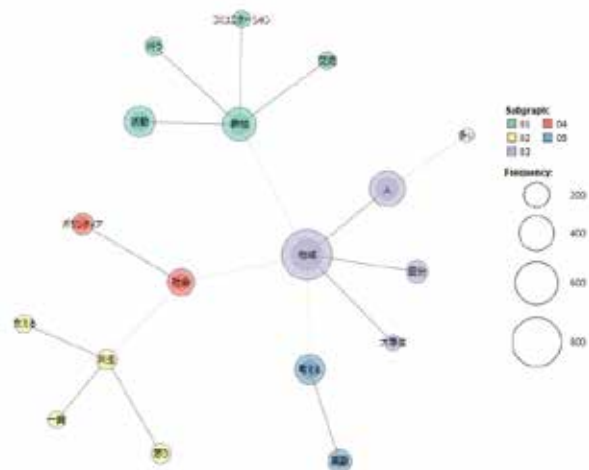


図1 実習前の共起ネットワーク分析結果

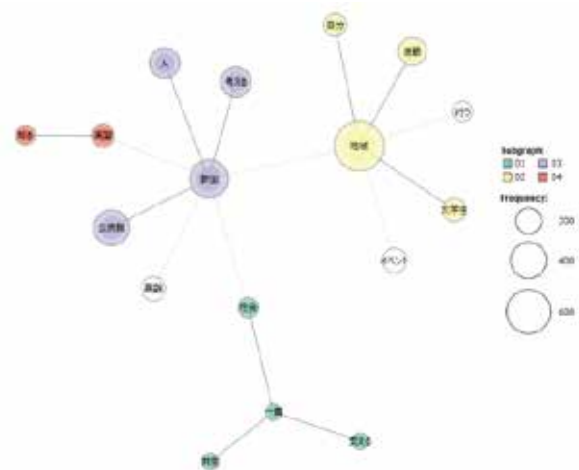


図2 実習後の共起ネットワーク分析結果

## 4.2 学生と地域とのつながりの変化

学生は、地域の住民から「若い」を肯定的に捉えた言葉として聞いていた。この経験から、学生は若い世代の存在が地域をにぎやかに明るくできるという認識を得て、高齢者や地域の住民とつながることを前向きに捉えることができるように変化したと考えられる。公民館によっては、館長や主事の方と一緒に公民館事業を企画し、学生自身も地域住民と同じ目線で事業に参加できたことにより、異世代への関心や視野が広がったと推察される。花田ら<sup>6)</sup>は、学外の人と接した経験は、コミュニケーション力の向上、能動的行動力の醸成に大きく寄与したと述べていた。本実習の成果として、公民館のボランティア活動へ早期から積極的に参加している姿が見られ、令和6年10月31日現在148名で現在も増加中であり、昨年23名と比較して大幅に増加した。実際に、実習先であった公民館と協働して実施した健康をテーマにしたイベントにおいて、学生が高齢者や小学生等の異世代の地域住民同士のつなぎ役として役割を担っていた。

また、図2の実習後の共起ネットワーク分析結果において、新たに「公民館」が加わり、「参加」「考える」「人」のサブグラフが示された。学生は、公民館を中心とした実習を通して、生活を支える地域のつながりを感じながら、大学生として地域で生活する人や地域に対してできることを考えていた。「公民館」と「実習」が加わったことで、「参加」がネットワークの中心となり、主体的な「参加」「考える」と共起したことから、大学生が公民館へ参加することが、大学生も地域の一員であるという実感につながったと考える。学生は、大学生が共生社会の一員としてできることとして、SNSによる公民館事業の発信等、地域参加への糸口を見つけていた。

## 4.3 今後の展望と課題

令和6年度より地域看護学実習の場を公民館に一律にしたことで、公民館が地域の活動拠点であり、人がつながる場所であることを理解していた。実習目標である生活者とその家族や生活を営む場を理解することができていたと考える。また、学生が地域の一員として事業に参加することが実習

の学びにつながっていたことから、学生が主体的に参加できる公民館活動を計画することが重要である。そのためには、実習時期やスケジュールについて公民館と協議を重ねていき、今後も実習が継続して実施できるよう体制を整えていく必要がある。

## 5. 結語

本研究は地域看護学実習による学びを分析し、生活を支える地域のつながりの捉え方に実習前後で変化が認められた。

## 謝辞

本実習において、A市をはじめ、協力いただいた公民館、ならびに公民館関係者、さらに地域住民の皆様に感謝申し上げます。貴重な実習環境を提供していただき、また学生を温かく迎えてくださったことに深謝の意を表します。

## 引用文献

- 1) 厚生労働省. “看護基礎教育検討会報告書”. 2024-4-15.  
<https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf>.
- 2) 山崎亮. ケアするまちのデザイナー—対話で探る超長寿時代のまちづくり. 医学書院, 2019, P.9-40.
- 3) 厚生労働省. “令和5年版厚生労働白書—つながり・支え合いのある地域共生社会”. 2024-9-30.  
<https://www.mhlw.go.jp/stf/wp/hakusyo/kousei/22/index.html>.
- 4) 樋口耕一. 社会調査のための計量テキスト分析内容分析の継承と発展を目指して. 株式会社ナカニシヤ出版, 2018.
- 5) 秋谷直矩, 坂井志織, 高梨克也. 「つながりの実感」を考える. 質的心理学フォーラム, 2021, 13, P.5-12.
- 6) 花田朋美, 深石圭子, 石綱史子, 他. 1年次教育プログラムにおける地域連携導入の試み—生活デザイン演習Aでのさがみはら環境まつり参加報告—. 東京家政学院大学紀要, 2019, 59, P.167-174.